

▲ 樹里安だより

ジュリアン

2016年
Vol.36

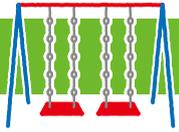


— 植木屋さんのおすすめ植物 (その1) — ジャボチカバ

フトモモ科の常緑高木。原産はブラジルと言われ、またパラグアイやアルゼンチン等南米地域に分布している。白色の花が幹から直接開花し、果実も直接幹に結実する珍しい熱帯の果樹。別名のキブドウもここに由来すると思われる。

3cm前後の濃い紫色の果実は美味で、原産地では食用として広く栽培されている。

熱帯地域が原産であるため、関東地方では鉢植えで栽培し、冬季は屋内での管理が推奨される。



潤いのある生活環境を演出

遊水地活用の新郷東部公園

“水に親しむ、緑に憩う。でも、いざという時には洪水を貯留します”という歌い文句の新郷多目的遊水地（新郷東部公園）が、川口市新堀に建設され市民に開放されている。

遊水地は、峯・新堀・東本郷地区を流れる辰井川の洪水対策事業として埼玉県が整備を進め、これに併せて川口市が市民の健康増進や憩いの場にしようと、8億2千万円の工事費をかけて公園施設を併設した。

遊水地は、川口市立新郷東小学校を囲むように造られた。最終的な総面積は10.575ヘクタール。貯水池は4つに仕切られているが、総貯水容量は13万2千立方メートル（未完成部分の貯水容量約3万立方メートルも含む）。貯水池は、運動やレクリエーションの催しなど多目的に使えるよう緑地となっているが、辰井川沿いの貯水池には小魚が生息し野鳥が集まるビオトープ的な池が設けられ、水質悪化を防ぐ浄化施設も備えられている。

公園施設は遊水地の東側に設けられた野外ステージのほか、砂場、シーソー、滑り台、ブランコなどの児童遊具、平行棒、肩こり・背伸ばしベンチ、ぶらさがり、上体そらしなどの健康遊具、また休養施設としてパーゴラ、ベンチなども多数配置している。駐車場は3箇所90台が収容可能で駐輪場、トイレなども設置されている。

遊水地の周囲には樹木も植栽された。サクラ90本、ハナミズキ25本をはじめオオムラサキツツジ、アジサイ、サザンカなどの花木からゲッケイジュ、アオキ、ヒイラギなどの常緑樹まで、高木は52種類471本、低木は35種類が3千平方メートルの面積に植えられた。成長すれば花や緑も楽しめる公園になるだろうと、今から楽しみにしている人も多い。

広い公園の少ない街なかの人たちが羨ましがらうような広々とした公園には、寒い季節に



もかかわらず、大勢の市民が押しかけている。中・高年の人たちは貯水池の仕切り堤防でジョギングやウォーキングに励み、母親に連れられてきた子どもたちはブランコや滑り台の遊具で歓声を上げながら楽しんでいる。貯水池の池には水鳥が姿を見せ、えさをついばむ風景も見られる。

公園情報

- 1 開園年月日 平成22年11月30日
- 2 所在地 埼玉県川口市大字新堀573-1
- 3 面積 105,750平方メートル（遊水地面積）
内91,087平方メートル（公園部分面積）
- 4 植栽数量 高木52種471本
低木35種3千平方メートル
- 5 公園の区分 種類 住区基幹公園
種別 地区公園





漢方薬としても効果抜群 スパイスの王様

シナモン (カシア・ニッケイ)

シナモンが“スパイスの王様”だということは、誰もが知っていることだろう。さわやかな清涼感とキリリとした辛味、やわらかい甘味が加わり、菓子、飲料、料理などに広く用いられている。それだけではなく、古くから漢方薬として使われているが、そのシナモンの原料がクスノキ科の常緑樹の樹皮だということは余り知られていない。

クスノキ科の樹木は、アジアの温帯から熱帯地域に1,500種以上が分布し、良い匂いのするものが多い。このうちセイロン（スリランカ）産がシナモン（セイロンニッケイ）と呼ばれ、最高級品とされている。品質はやや落ちるが、中国、インドシナ半島原産のカシア、中国南部、ベトナム原産のニッケイなどがあり、シナモンの代用品として扱われている場合も多い。

若い人には縁が遠くなったようだが、年輩の人が子供のころ、紙芝居屋さんからもらって喜んでいた駄菓子の「ニッキ」は、この香辛料の味である。京都の名物菓子・八ッ橋もこの味だ。

シナモン系の香辛料と人の関わりは古く、紀元前からエジプトでは、ミイラを保存するため防腐剤として使われてきたという。また、各地で儀礼に頻繁に用いられていたのも、東西貿易の重要品目の一つとなっていた。

取引が盛んになるにつれて希少価値を高めて値をつり上げたり、貿易を独占しようとするため、考え得る限りの手を打ち、嘘もついたそうだ。その一つに「シナモンは大きな肉食鳥が巣を作るのに使われる。大きな肉塊を餌に仕掛けておくと、その鳥が巣に持ち帰る。するとその重みで巣が壊れて落ちてくるので、その時ようやく手に入る」と、勿体を付けるという話も残っている。

日本には8世紀に乾燥させたシナモンが渡ってきた。「桂心」という名の薬物として伝来し、現在でも正倉院の御物の中に保存されている。

江戸時代の享保年間（1716年～1736年）になって樹木として渡来し植栽されたと思われ、このときの樹木はニッケイの系統とみられている。成木は高さ10メートルを超え、幹



(ニッケイ)

の太さも50センチにもなる。現在は和歌山、高知、熊本など、暖地で栽培され、シナモン、カシアなど同属の香辛料も盛んに輸入されている。

古代ギリシャでも甘美な香りから「愛をかきたてる」と重宝された。そのエキゾチックな風味は、ケーキなどの洋菓子や紅茶などの飲み物はもちろん肉、野菜料理など広く用いられている。喫茶店でシナモン・スティックが添えられたコーヒーを飲むのも、ちょっと乙なものだ。



漢方薬としての効能も幅広い。製薬会社のCMではないが、桂皮アルデヒドなどが作用して胃や臓器の機能を亢進、発汗作用を促し、解熱、鎮痛薬として中枢神経の興奮を鎮静し、水分代謝を調整してくれることから、感冒や疼痛にも応用されるなど、これ以上の宣伝文句はないほどの“万能薬であって万能スパイス”である。

シナモンとその仲間

【セイロンニッケイ (Cinnamomum verum)】

インド、マレーシア、セイロン島原産。スパイスのシナモンはこの品種の樹皮を乾燥させたもの。セイロン島産が最高級品とされる。

【カシア (Cinnamomum cassia)】

中国、インドシナ半島原産。シナモンの代用品、またシナモンと称して販売されることもある。菓子や料理のスパイスとして広く使用される。

【ニッケイ (Cinnamomum sieboldii)】

中国南部、ベトナム原産。日本の暖地でも栽培される常緑高木。昔は“ニッキ”と称して駄菓子屋さんなどで売られていた。

【タマラニッケイ (Cinnamomum tamala)】

ヒマラヤ山麓から中国南部に分布。樹皮はシナモンの代用品として使われる。インドでは葉を乾燥して香辛料として使用する。



記念樹にふさわしい木とそのいわれ

婚約や友情の記念

クチナシ

(アカネ科クチナシ属)
(常緑広葉樹・低木・中庸樹)



クチナシの語源は、実が熟しても口を開けないことから。婚約者への愛や友情など、他人に語らぬ真実を無言であらわすクチナシを、心の証として薦めたい。無言の美と、夕暮れに白く浮かぶ清楚な花の美しさに、婚約の約束や不変の友情という、人生最高の誓いをこめて植樹する。

1. 特徴

開花期 6～7月、結実期 10～12月。成長はややおそい。

2. 植えるときの注意

時期 4～6月

場所 半日陰でも育つが日なたのほうが花をよくつける。土質は特に選ばない。

3. 管理のポイント

せん定は花が終わったらすぐに行う。虫害に気をつける。

参考：日本緑化センター 木を植えよう 記念樹にふさわしい木とそのいわれ



川口緑化センターの主なイベント開催結果報告

1 第18回春の園芸フェスタ

平成27年5月23日(土)～24日(日)

川口駅東口公共広場(キュポ・ラ広場)において春の園芸フェスタを今年度も開催いたしました。

会期中は植木や草花の展示販売をはじめ、ケータリングカーによる軽食や新鮮野菜の販売、バラの手入れ講習やフラワーアレンジメント体験会等様々な催しが実施され、いずれも大変好評でした。



2 チェーンソー特別教育講習会

平成27年6月20日(土)～21日(日)

各種建設機器等の操作技術の向上及び労働災害の防止を目的として、労働安全衛生法に基づく、チェーンソーの特別教育講習会を2日間開催いたしました。当日は造園業者等実際に業務で使用する方々が多く参加され、技術と知識の普及が図られました。



3 サイタマ道の駅フェスタ

平成27年8月5日(水)

県内道の駅のPRを目的として、さいたま新都心けやきひろばにおいて初めてとなる、サイタマ道の駅フェスタが開催されました。当日は道の駅「川口・あんぎょう」のほか12駅が出展され、当駅では植物の展示やPRパンフレットの配布、樹里安アイス等のオリジナル商品の販売を行い、併せてマスコットジュリアンの練り歩きも実施いたしました。



4 第80回秋の安行花植木まつり

平成27年10月10日(土)～12日(月/祝)

秋の安行花植木まつりを「川口緑化センター」「埼玉県花と緑の振興センター」「市営植物取引センター」の3施設を会場に今年も開催いたしました。花植木や盆栽の展示販売の他、恒例となりました銘品盆栽展は盆栽24点を展示し、併せて親子盆栽体験教室、盆栽風苔玉体験教室、鳩ヶ谷高校による簡単コサージュ体験会などを実施いたしました。更に期間中は「新井宿駅」と各会場、市立グリーンセンターを結ぶ無料バスを運行し、多くの方々にご来場いただきました。





神話・伝説の花と植物

(その4)

花にまつわる神話・伝説は、目に見えない超自然的な霊物への畏敬の念から生まれたものである。神々は非常に人間的で喜怒哀楽を持っているというが、人間がおよびもつかない力と美しさがある。その神々への親しみとあこがれは美しい花や植物と重ね合わされ、語りつがれてきた。

ハウセンカは女神の化身

花ことばは「私にふれないで」。西ヨーロッパには、このような伝説がある。昔、ギリシャ宮殿で、ある女神が盗みの疑いを受けた。後で疑いは晴れ、潔白が証明されたが、女神は受けた侮辱に耐えられず、自ら求めてハウセンカの花となった。実に触れると、はじけて種子が飛び出るのは、花になっても女神が懐を開き「私にふれないで」と、無実を訴えている為だという。

王子の血が咲かせたヒヤシンス

スパルタ王の王子ヒーヤシンサスと太陽の神アポロが、ある時、鉄環投げに興じていたところ、むつまじい二人の仲を妬んだ西風の神ゼフィラスがアポロを懲らしめてやろうと、投げた鉄環に風を強く吹きつけたところ鉄環は誤って王子に当たり、王子を殺してしまった。悲しんだアポロは、王子の優雅な姿を記憶に残そうと王子が流した血で染まった大地に一本の花を咲かせ、その花に王子の名にちなんで「ヒヤシンス」と名づけた。その花にギリシャ語で「悲しいかな、悲しいかな」と刻み、冥福を祈ったと言われている。

キリスト降誕の花ポインセチア

緑は救主キリストによって人類に与えられた永遠の命、赤は神の愛を示していると考えられている。現産地のメキシコの伝説によると、両親を失ったマリアは、貧しいがゆえにクリスマスツリーに幼子キリストの像への捧げものの用意もできず一人さびしくしていた。そこへ友人が来て、たとえ道の草でも心をこめて捧げればキリストに喜ばれると説得した。寺院の中はステンドグラスを通して美しい光に満ちており、彼女は道すがら摘んできた草を心をこめて祭壇に捧げると、その草の下葉は緑、上の葉は美しい緋赤色に変わった。彼女の真心が通じ、キリスト降誕の花ポインセチアとなったという。



ジュリアン

樹里安

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成28年3月15日

発行：公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家 844-2

TEL.048-296-4021

ホームページ：<http://www.julian.or.jp/>